

A Practical Study on the Teaching of the Music Development that Students Proactively Work on : Focusing on do a Skit, Geki-Asobi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, 淳子, SAITO, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1212

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学生が主体的に取り組む音楽科の 授業づくりに関する実践的研究

～劇あそびを中心として～

齊藤 淳子

キーワード：劇あそび，主体的，授業づくり

1. はじめに

本学で開講されている音楽に関する講義は、「音楽Ⅰ（必修）」「音楽Ⅱ（必修）」「音楽Ⅲ（選択）」「音楽Ⅳ（選択）」「保育内容（表現・音楽）（必修）」「初等教科教育法（音楽）（選択）」の6科目である。「初等教科教育法（音楽）」は、小学校教諭二種免許状を取得する者のみが受講するものであるため、大部分の学生はその他の4ないし5科目を受講することとなる。

「初等教科教育法（音楽）」以外の講義内容は、ピアノ実技や音楽理論を中心とし、童謡曲やわらべうた等の歌唱教材の演習、器楽教材の演習、指揮法、模擬授業、和楽器による創作活動などが行われている。本学では「演劇」という科目も開講されているが、例年、受講する学生は非常に少なく、年度によっては受講人数が規定に達せず開講されない場合もある。しかし、学生が卒業後に就職することとなる幼稚園や保育園、小学校ではお遊戯会や学芸会・学習発表会等を開催し、そこで発表するために劇や舞踊劇に取り組んでいることも多い。それにも関わらず、ほとんどの学生は劇に関する科目や講義を一度も受けることなく現場に入っているという現状があった。

また、筆者は2016年度、「保育・教職実践演習（幼・小）」の担当をしたのだが、筆者を含めた担当教員7名の中に音楽科教員が2名いたため、クラス別に演習を行う際には内容の棲み分けをする必要があった。そこで筆者は、2年間の学びの集大成ともいえる「劇あそび」の体験ができる内容の講義を行うこととした。

「劇あそび」の講義は1コマ（90分）だけであったが、脚本の紹介や「劇あそび」の計画等に関する説明をするだけでなく、クラス毎に一つの作品に取り組み、その日の講義の最後に発表し合うこととした。50分弱という短い時間ではあるが、役割分担や練習だけでなく、生演奏による伴奏や簡単な小道具づくり等も行った。このような体験をすることが、「劇あそび」の指導の

難しさや綿密な計画・準備の必要性、配慮等について考える機会となるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教員・保育士を目指す学生が「劇あそび」に関する体験をすることの意義及び「劇あそび」体験を通して、学生が主体的に取り組むことができるような授業づくりの構成について考察することにある。

3. 研究の方法

「劇あそび」に関する先行研究の検討及び2016年度の後期に行った「保育・教職実践演習(幼・小)」におけるクラス別演習での実践を中心に、2017年度の後期に行った「音楽Ⅳ(選択)」での実践と合わせて、授業に関する学生の感想や発表映像を用いながら考察を行った。

4. 先行研究

「劇あそび」に関する先行研究のうち、幼児や児童を対象とした「劇あそび」の実践報告や指導法の研究はたくさんあるのだが、教員・保育士養成における「劇あそび」の指導に関するものはあまり多くはない。

本研究では、久世安俊の「音楽表現技術の学び(Ⅱ)——音楽劇の創作活動——」⁽¹⁾、佐藤厚の「演劇的表現活動の実践～児童文化演習の実践活動より～」⁽²⁾、「演劇的表現活動の実践Ⅲ～児童文化演習の実践活動より～」⁽³⁾について検討した。

久世は、本学同様、音楽に関する科目の中で「劇あそび」を実践している。K大学K短期大学で開講⁽⁴⁾されている音楽に関する科目は、「ピアノⅠ(半期)」「ピアノⅡ(半期)」「ピアノⅢ(半期)」「音楽(声楽)(通年)」「実技演奏(半期)」「音楽(器楽)(半期)」「音楽表現(指導法)(半期)」「劇あそび(指導法)(半期)」と8科目(通年の科目もあるため、コマ数的には本学の9科目に相当する)あり、本学に比べるとかなり多い。数多く開講されている音楽に関する科目のうち、1年次に通年で開講されている「音楽(声楽)」の後期に音楽劇の創作活動を行い、さらに2年次の後期には幼稚園教諭二種免許状取得希望者の必修科目となっている「劇あそび(指導法)」が開講されており、「劇あそび」に関する内容が多く実践されていることがわかる。

久世の論文(研究ノート)には、研究の目的がはっきりと示されていないのだが、「音楽

(声楽)」の後期に、1か月間にわたって行った創作活動での学生の様子をアンケートから分析し、保育における音楽表現を学生がどのように捉えているかを考察している。

久世の実施した創作活動の方法は、以下の通りである。

1 クラスを4グループに分け(1グループ:8人~9人)、グループワークとした。テーマは自由で、子どもの歌を主とした10分程度の音楽劇を作成し発表を行う。告知当日も含め3週の授業を準備・練習回とし、4週目に発表を行う。発表は動画に収め、5週目に鑑賞を踏まえてディスカッションを行った⁽⁵⁾。

テーマが自由なため、オリジナルの物語を作っているグループが多いようであるが、中には既存の物語を用いているグループもある。これは「10分程度の音楽劇」という縛りしかないため、このようなことが起こったのではないかと考える。K大学K短期大学では音楽に関する科目が多く、「劇あそび」に関する活動を行うにもかなりのゆとりがあるため、既存の物語をベースにするのではなく、オリジナルの物語で創作するように求めてもよいのではないかと考える。

また、自分達の発表を動画で確認し、さらにそれらを元にディスカッションもできる環境があるならば、客観的に自己を振り返ることができ、保育者となった時に考慮すべき点との繋がりも持てるのではないかと考える。しかし、久世の調査項目からは保育における音楽表現まで言及した内容にはあまりなっていないように感じる。尚、調査項目は以下の通りである。

1-1. あなたの担当(役柄)を教えてください。

また、そこを務めるにあたって考慮したこと、工夫したことを教えてください。

1-2. 成果は発表できましたか。

2-1. 自身の発表を見てどうでしたか。良かった点、気になった点を挙げてください。

2-2. 音楽劇の取り組みについて。満足ですか、不満足ですか。

2-3. 今回の取り組みで学んだことを教えてください⁽⁶⁾。

この調査から久世は、グループワークの難しさを学生は痛感したと述べている。しかし、どのグループも構成を工夫し、各人の才能と結びつくことで活動自体は楽しく、充実した取り組みになったとも述べている。また一方で、グループの編成方法を工夫しなければ、他人任せになってしまうり、学生のやる気がそがれてしまったりというような問題点を挙げ、改善の必要性を感じていた。

佐藤は、U女子短期大学で開講⁽⁷⁾されている「児童文化演習」という選択科目の中で「劇あそび」に関する内容を実践している。この科目は音楽に関する科目ではないが、実際に「劇あそび」を行う際には、歌も入っていたりするものもあるようである。この「児童文化演習」を受講しているのは15名程度と少ないようであるが、附属幼稚園（対象園児は年少から年長までの163名）で「朗読劇」と「劇あそび」の実践演習も行い、子どもたちの前で実際に表現するという活動を行っている。

佐藤は、「演劇的表現活動の実践～児童文化演習の実践活動より～」の中で、この講義の実践活動の目的を次のように述べている。

〈学生たちにとって〉

- ・ 附属幼稚園の子どもたちと表現する楽しさを共有する。
- ・ 保育者を目指す者として、実際に子どもたちの前に立ち、指導、表現することになるまでに、より多くの子どもたちの前でお話を演じたり一緒に劇を遊ぶ中で、自己表現力の向上と、学生自らが保育者になるべく資質を探る。
- ・ 演劇表現活動を通じ、様々なキャラクターを研究模索する中で人間観察力やそれぞれの立場を理解する力を養う。

〈子どもたちにとって〉

- ・ お話（フィクション）の世界を十分楽しむ。
- ・ 劇あそびを通じて、自己表現できる子どもや、少々恥ずかしがりやの子どもも、共に楽しみながらお話の世界を共有することで、互いに助け合い、理解し合う「コミュニケーション力」を育てる土台とする。
- ・ 自己表現することに自信を持つ⁽⁸⁾。

久世同様、佐藤も比較的時間に余裕がある中での「劇あそび」実践のようである。また、佐藤の場合は受講人数も少なく、「劇あそび」を行うには程よい人数であるように感じる。

附属幼稚園で実際に子どもたちの前で発表したり、子どもたちと一緒に活動できたりというのは、自分達だけで完結する活動と違い、子どもたちの生の反応を見ることができるとともに、子どもたちにとっても学生が上手くフォローしてくれることで、伸び伸びと活動できるという点ではとても良いと考える。しかし、このような活動を行う場合、発表までの取り組みの時間をしっかりと確保できなければならず、本学のようにタイトな時間では自分達だけで完結する方がよいと考える。

さらに佐藤は、「演劇的表現活動の実践Ⅲ～児童文化演習の実践活動より～」の中で次のよう

に述べている。

教育の中に「劇あそび」を取り入れたジョン・デューイ (John Dewey) は「子どもの精神の創造的遊戯は彼が使用する事物を中心として群がり生ずるところの、～中略～ 一層明確な基礎が得られる」としている⁽⁹⁾。

確かにデューイは『学校と社会』の第5章「フレーベルの教育原理」⁽¹⁰⁾の中で「遊戯」について述べている。佐藤は、この「遊戯」を「劇あそび」と解釈しているように読み取れる。しかし、『学校と社会』の第5章でデューイが言っている「遊戯」と、今日の幼稚園等で実践されている「劇あそび」とは似て非なるものであると考える。

なぜならば、今日の幼稚園等で実際に行われている「劇あそび」は、昔話などを中心に既存の物語を台本化したものや童謡による音楽会形式のようなものが多く、保育者が作品を選び、子どもたちに与えたることがほとんどであるからである。しかし、デューイは次のように述べている。

すべての教育活動の第一の根源は子どもの諸々の本能的・衝動的絵な態度および活動に存するのであって、他人の観念を借りるにせよ、或は本人の感覚にうったえるにせよ、とにかく外部的な材料を提示し、適用することに存するのではないということ。したがってまた、子どもたちの数かぎりなき自発的活動、すなわち遊戯・ゲーム・物真似さては幼児の一見無意味な動作—在来はうまらぬもの、無用なものとして無視されるか、或は積極的に邪悪なものとして難ぜられさえた言動—は、これを教育的に用いることができる。いな、教育的方法の礎石であるということ⁽¹¹⁾。

また、デューイは「遊戯」のことを次のように述べている。

遊戯は子どもが自分のイメージと興味をなんらか満足できるような形に具現するさいにおける子どもの全能力・全思想・肉体的全運動の自由な作用であり、相互作用である⁽¹²⁾。

デューイは「遊戯」を子どもたちの自発的な活動、自分のイメージの具現化するための作用と述べており、これは「劇あそび」というよりも「ごっこあそび」に近いのではないかと考える。佐藤が言うように、「劇あそび」は様々なキャラクターを演じたり、自己表現したり、コミュニケーション力を育てる上でも重要なことは明らかであるが、短絡的にデューイのいう「遊戯」を「劇あそび」と置き換えることはできないのではないかと考える。

以上のことから、本研究では学生たちが現場に入った時に指導することになるであろうと予想される、今日、幼稚園等で取り組まれているような「劇あそび」を扱うこととした。また、本学のように音楽に関する科目が少ない中で「劇あそび」に関する実践を行うには、既存の物語や既知の曲を利用し、大道具・小道具づくりも身の回りにあるものを利用したり、制作する場合にも時間をかけず、簡単にできるものだけにするなどの工夫をしたりすることで取り組むことができるのではないかと考えた。さらに、たとえ自分達の発表の動画を見て振り替えることができないとしても、他のグループの発表を見ることで新しい発見をしたり、自分達の活動をフィードバックすることができるのではないかと考えた。

5. 授業実践の概要及び考察

(1) 受講者

① 2016年度子ども学科2年生（「保育・教職実践演習（幼・小）」受講者／12クラス）

本学子ども学科は、どの学年も12クラスに分かれている。一昨年度の2年生は1クラスあたり15名程度で構成されていた。保育・教職実践演習は、クラス別演習を2クラスずつで行っていたため、1回の講義に参加する学生は30名程度であった。しかし、免許を取得しない学生は受講しないため、クラスによって人数にバラつきがあり、一番少ないクラスは26名、一番多いクラスは34名であった。クラス別の受講者数は表1の通りである。

表1 クラス別受講者数

1組 14名 2組 15名 (合計29名)	3組 17名 4組 17名 (合計34名)	5組 16名 6組 15名 (合計31名)
7組 17名 8組 16名 (合計33名)	9組 14名 10組 12名 (合計26名)	11組 15名 12組 15名 (合計30名)

② 2017年度子ども学科2年生（「音楽Ⅳ」選択者／2クラス）

2年次後期に開講される音楽Ⅳは選択科目である。昨年度は水曜日と木曜日にそれぞれ1コマずつ開講した。水曜日クラスは32名、木曜日クラスは17名と人数にバラつきがあった。ただし、水曜日クラスの「劇あそび」の授業実践を行った回は、使用教室の都合上、通常の曜日と異なることとなってしまったため欠席者が多くなってしまい、実際は両クラスともほぼ同じ人数で授業を行った。

(2) 実施年月日

- ① 2016年度の「保育・教職実践演習（幼・小）」における「劇あそび」の授業実践日は以下の通りである。

7・8組…2016年10月19日（水）、9・10組…2016年11月2日（水）、
1・2組…2016年11月16日（水）、5・6組…2016年12月14日（水）
3・4組…2016年12月21日（水）、11・12組…2017年1月11日（水）

- ② 2017年度の「音楽Ⅳ」における「劇あそび」の授業実践日は以下の通りである。

水曜日クラス…2018年1月24日（水）
木曜日クラス…2018年1月18日（木）

(3) 1コマあたりの授業内容

授業の進め方は、保育・教職実践演習も音楽Ⅳも基本的には同じである。しかし、保育・教職実践演習はクラス毎の受講であるが、音楽Ⅳは選択科目であったためクラスはバラバラであった。そのため、保育・教職実践演習はクラス毎に、音楽Ⅳはその場で2つのグループに分かれてもらい活動を行うこととした。

1コマ90分を、①「劇あそび」についての解説、②クラス（グループ）毎に活動する時間、③発表会、と大きく3つに分けて授業を進めた。

「劇あそび」に関する書籍はいろいろ出版されているが、今回は『0～5歳児の劇あそび脚本ベストセレクション』⁽¹³⁾を用いた。本書には「3びきのこぶた」や「おむすびころりん」「大きなかぶ」等、学生に馴染みのある作品の他、ももたろうをアレンジした「スペースももたろう」や歌と踊りだけで構成されている「森のミュージックショー」等の作品も掲載されている。また、劇中歌は童謡の替え歌だったため、限られた時間の中で練習を進めるには適切であると判断した。さらに本書は、導入あそび等を含めた本番までの保育スケジュールや衣装・小物の作り方等も詳しく書かれており、初めて劇指導をすることになった際の参考することができるのではないかと考えた。

① 「劇あそび」についての解説（20分）

前述の脚本ベストセレクションを参考に、本番までの保育スケジュールや保護者への依頼等を含む「劇あそび」の計画に関すること及び本時の最後に発表し合う脚本についての説明を行った。学生に取り組んでもらう作品は「3びきのこぶた」と「森のミュージックショー」というタイプの異なるものとした。「3びきのこぶた」は物語に馴染みがあり、ちょっとした音楽劇のよ

うな作品, 「森のミュージックショー」は歌と踊りによる音楽会のような形式の作品である。

② クラス (クラス) 毎に活動する時間 (50 分)

2 クラス (2 グループ) 合同で全体の説明をした後は2 教室に分かれ, 発表までお互いのクラス (グループ) の様子がわからない状態を作った。指導者は, それぞれのクラスの様子を時々伺いながら, 残りの準備時間を伝える程度にとどめた。そのため, この時間は完全に学生が主体的に活動となった。学生は, 最初は戸惑いながらも, 限られた時間で役割分担や練習, 小道具づくり等, 発表に向けての活動を行った。

尚, 発表をするにあたり, 学生たちには「必ず一人1回はステージに上がり, セリフを言うか, 歌をうたうか, 伴奏をすること」という条件を与えた。

また, 画用紙や色画用紙, ガムテープ, マジック等をクラス毎に配布し, 必要に応じ使用してもよいこととしたところ, クラス (グループ) 毎に活動できる時間は短時間であったにも関わらず, ほとんどのクラスがお面やマイクなどの小道具 (図1) を準備した。

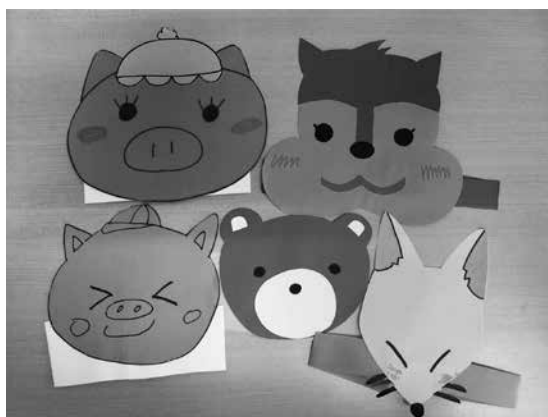


図1 学生が作成した小道具の一部 (掲載許可あり)

③ 発表会 (20 分)

役割分担等の打ち合わせを入れると実質的な練習時間は30分程度であるため, 台本は見てもよいこととして発表を行った。他のクラス (グループ) の発表 (図2) を見ることで学生は, 自分達が行った作品とは異なるタイプの作品を知るきっかけとなった。



図2 話し合い後の発表の様子 (掲載許可あり)

6. 学生の感想

以下は、お互いに発表し合ったあとに書いた感想の一部である。

〈2016年度 「保育・教職実践演習（幼・小）」受講者〉

- ・実際に自分達でやってみて、役決めの時など、どうしても役が偏ってしまったりする 때가 あったけれど、学んだようにジャンケンなどをして決めないように注意しました。
- ・やっぱり劇をやるにはとても緊張するなと思いました。子どもたちが緊張と不安を持っていることを忘れず、気持ちの負担を減らすためにはたくさんほめることが大切だと思います。楽しかったです。
- ・とても楽しく劇あそびをすることができました。楽しく行くと、終わった後に達成感があり、またやってみたいという気持ちになることができました。完成度の高さよりも、楽しさを大切に考え、進めていけるとよいと思い、ぜひ実践したいです。
- ・緊張しましたが、元気に明るく、楽しく行うことができてよかったです。自分達だけでなく、他のクラスの劇を見ることにより、工夫や歌の歌い方や動き等を見て、自分達にないものを発見することができました。今回、劇を行って思ったことは、実際に自分達が行った上で子どもに指導することが大切だということです。
- ・おじぎの仕方や登場の仕方、声の大きさや動きの大きさなど、練習の時点でしっかりやっていないと本番では緊張も加わりうまくできないと学びました。恥ずかしさはなしで、自分達も楽しむことが大切だとわかりました。

〈2017年度 「音楽Ⅳ」受講者〉

- ・3びきの子ぶたはよく知っているお話なので、子どもたちがやる時は、少しアレンジを加えたり、役を増やしたらもっとおもしろいと思いました。大人数の役を決めて、セリフの練習をして、合わせて、と学生だからまあまあスムーズにできたけど、子どもたちを前にしたら、まとめるのがとても大変なのかなと感じました。
- ・台本を読んで動きを知るのが難しかったです。知っている話だったので簡単にできたけど、知らない話でもっと時間がかかるのだと思いました。子どもに教えるときはなるべく動きを大きくして、繰り返し教える必要があると思いました。また、お昼の時間に曲だけ流して曲を覚えてもらうことも楽しい劇につながるのではないかと思います。
- ・グループに分かれて劇をしたことで、まず一つひとつの役を理解し、決定するのに時間がか

かと思いました。時間がかかったとしても、一人ひとりのやりたい思いを丁寧に受け止めながら言葉掛けをすることが大切だと感じました。どのような流れで、どのように進めていくか、しっかりと考える大切さにも気づきました。子どもたち自身が作り上げていくことがたち成感や自信に繋がっていくのではないかと実感しました。グループとお話を練習したり、歌ったり、ダンスをすることがとても楽しかったです。

- ・セリフを「こんな風に言おう」や「もっとゆっくりね」などということは、大人だから伝えればすぐに変えられるけれど、子どもに上手く伝えるのは難しいと感じました。また、セリフを覚えるのも、歌を歌いながらダンスをするのも何度も行って出来るようにしなければと感じました。役を決めるのも、その子によってはやりたくない役だった時にどのように決めれば良いか戸惑いました。
- ・短時間の中でこだわりだすと時間がかかってしまうので、ある程度のところで終わらせることが必要だと思いました。みんなで同じイメージをして取り組むことはとても楽しかったです。材料が大きくないぶん、工夫した劇ができたのでよかったです。ダンスがみんなで確認していてもバタバタしてしまいました。
- ・ピアノ担当でしたが、ピアノに集中しすぎると他の人達に目がいかず、視野がせまくなっていると感じました。ピアノをスムーズに弾くことができ、尚且つ、子どもの姿が見られるよう練習を重ねていかななくてはいけないと感じました。そして、歌う人に合わせて伴奏のテンポを変化させていかななくてはいけないと反省しました。
- ・大人でやるとなると15分もあればできますが、子どもたちと劇をやるとなると前もって計画を立てる必要があると思いました。子どもたちに入場の仕方や退場の仕方を教えるのも難しいと思いました。
- ・ダンスも年齢ごとで難しさを変えたりと、楽しむ方法がたくさんあった。うたは役を決めてやると一人ひとりやる気を持ってできるなと思った。うたは楽しいから、やってる方も楽しかった。上手にできるともっと盛り上がると思った。

ひと通りの説明後、短時間ではあっても実際に体験することにより、机上の学習だけではわからない気づきをたくさん見つけていることが感想からも読み取れる。また、この実践が卒業間近だったことも重なり、多くの学生が幼稚園や保育園への就職を決めているため、教育者・保育者としての視点で取り組んでいる学生も多くおり、現場に入る前に劇あそび体験ができてよかったという感想も多くあった。

7. まとめと今後の課題

「劇あそび」を実際に体験してみるということに対し、多くの学生が最初は抵抗感を示していた。また、必要最低限の情報だけを得た状態で、突然、自分達だけで何とかしなければならない時間ができたことに戸惑う様子も見られた。しかし、時間が限られており、最後には発表しなければならないという枷を課されたことで、すぐに仲間同士で話し合いを始め、役割分担や自分達の表現を考え、練習を進めているうちに楽しく活動することができたようで、発表会では照れながらも一生懸命取り組む姿が多くみられた。また、同じ脚本であっても配役分担の工夫の仕方が違ったり、小物を準備したりと、限られた時間・空間・道具を上手く活用する様子も見られた。どのクラス（グループ）も比較的ピアノが得意な学生が伴奏を担当していたが、曲ごとに担当を変えたり、1曲を2人で弾くなどの工夫も見られた。

実際に「劇あそび」を体験してみたことで、簡単だと思っていた「劇あそび」が意外に難しいと感じ、指導する立場となった時には綿密な計画や準備、配慮の必要性に気づくことができた学生も多くみられた。以上のことから、たとえ短時間であったとしても、何もかもが与えられたのではなく、自分達で主体的に活動する「劇あそび」の体験することは有効であるといえる。

昨年度から「劇あそび」については後期開講の「音楽Ⅳ」で扱っている。2017年度は2年次の4割弱の受講者であったが、今年度の「音楽Ⅳ」の受講者は昨年よりもかなり増え、2年次の半数近くが受講している。そのため、今年度はグループ数を増やし、取り組む作品もこれまでとはまた違ったタイプのものを選ぶ必要がでてきた。

さらに多くの学生に体験してもらうためには、次年度以降、どの科目で「劇あそび」を扱うか検討する必要がある。

引用文献及び参考文献・参考 web 資料

- (1) 久世安俊 (2017) 「音楽表現技術の学び (Ⅱ) — 音楽劇の創作活動 —」『近畿大学九州短期大学研究紀要 47号』, 近畿大学学術情報リポジトリ <https://kindai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19255&item_no=1&page_id=13&block_id=21>, 2018年5月アクセス
- (2) 佐藤厚 (2011) 「演劇的表現活動の実践～児童文化演習の実践活動より～」『紀要 34号』, 上田女子短期大学, 上田女子短期大学リポジトリ <https://uedawjc.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=114&item_no=1&page_id=38&block_id=28>, 2018年5月アクセス
- (3) 佐藤厚 (2013) 演劇的表現活動の実践Ⅲ～児童文化演習の実践活動より～『紀要 36号』上田女子短期大学, 上田女子短期大学リポジトリ <https://uedawjc.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1231&item_no=1&page_id=38&block_id=28>

- id=28), 2018年5月アクセス
- (4) 近畿大学九州短期大学ホームページ, 保育科カリキュラム, 平成29年度入学生向け講義概要
(http://www.kjc.kindai.ac.jp/files/uploads/2017_syllabus-cc.pdf), 2018年9月アクセス
 - (5) 久世安俊 (2017), p. 205
 - (6) 同上書, p. 206
 - (7) 上田女子短期大学ホームページ, 幼児教育学科, 専門科目シラバス (授業概要) (http://www.uedawjc.ac.jp/study/education/images/edu_syllabuss2018.pdf), 2018年9月アクセス
 - (8) 佐藤 (2011), pp. 97-98
 - (9) 佐藤 (2013), p. 43
 - (10) J. Dewey (1915) *The School and Society, revised edition*, J. デューイ (宮原誠一訳: 1957) 『学校と社会』岩波書店, pp. 121-138
 - (11) 同上書, p. 122
 - (12) 同上書, p. 123
 - (13) 劇あそび・保育研究所 (2011) 『0～5歳児の劇あそび脚本ベストセレクション』ナツメ社

(提出日 2018年9月28日)